

## 福島清彦先生の人と学問

大谷 順彦

福島清彦氏は2010年3月、立教大学経済学部を65歳で定年退職された。福島氏は民間企業と海外での経験が長く、専任の大学教員としての経験は短い人であった。その特異な経歴を生かし、研究でも教育でも、独自の諸成果を上げてこられたように思われる。

私は長年、友人として、また同じ経済学者として福島氏の研究を見てきたので、『立教経済学研究』に福島氏の研究歴をたどり、また福島氏の研究成果について一定の評価を行っておきたい。

福島氏が一橋大学に入学した1963年4月は、まだ60年安保のほとぼりが冷めやらぬ時期であった。当時はどこの大学の経済学部でも、マルクス経済学と近代経済学が対等の地位で扱われ、両方の経済理論を経済学部の学生たちは学んでいた。「対等」と言うより、むしろ学生の人気はマルクス経済学の方が高かったように思われる。

日本の将来は社会主義で行くべきか、それとも修正資本主義か。そんなことを多くの人々が、本気で考え、議論していた時代であった。福島氏もそのような時代風潮の中で学び、若い頃はマルクス経済学を身につけ、マルクス主義的な思考法でものを考えられることが多かったようである。

学部時代には、日本経済史を教えておられた永原慶二教授のゼミに福島氏は属されていた。永原氏の専門分野は日本中世史だったが、福島氏はゼミで、中世史ではなく、昭和期（戦前）の日本農業政策、とりわけ自作農創設維持事業を勉強されたと聞いている。永原教授に引率され、山梨県や群馬県に他のゼミ生と共に短期滞在し、市や町役場の古い文書から経済統計を作り、それを分析するといったことにも従事されていた。

学部の卒論や修士論文も独自の資料から戦前の自作農創設維持事業を扱った実証的な研究論文である。1967年に経済学部を卒業後、大学院修士課程に進まれたが、1969年修士号を取得後、福島氏は新聞社に入り、ジャーナリストの道を歩み始められた。しかし、新聞記者としての道をその後ずっと進まれたのではない。8年9ヶ月ほどの記者生活の後、1977年末には新聞社を辞め、1978年1月には(株)野村総合研究所に入社されておられる。

駆け出しの研究者から新聞記者へ、新聞記者からエコノミストへの転身である。この間の事情については、福島氏自身が立教大学大学院経済研究科の学生たちが作る研究誌『立教経済学論叢』第74号、2010年2月刊の中で述べておられるので、それを引用したい。福島氏は人生半

ば、若い時期の転身をこう説明しておられる。

「40年以上も前のことだが、(大学院修士課程の学生時代……引用者) 先行きについて沈黙考しているうちに、教授人生よりも実社会で自らの知識と活力を、多少は生かせるような仕事をしたい気持ちが強くなった。

大学の外に出ると、企業人は売り上げを伸ばし、利益を上げるためにすさまじい競争をしている。政治家は自ら正しいと信じる政策実現のため、政治活動に余念がなく、官僚は所管する行政分野の政策を企画し、執行するという法律上の職務を忠実に果たそうとしている。市井の人びとのこういう日常活動を観察し、それに関わりを持って行く仕事の方が面白い。一生大学の中にこもる学者生活より、私には実社会で揉まれる暮らしの方が向いているのではないかと考えて行くうちに私はそういう結論に達した。

それなら、普通のメーカーや商社、銀行でサラリーマンをするより、ジャーナリストになろう。経済を勉強してきたのだから、経済ジャーナリストが良い。そう考えて私は修士2年目の秋、経済に関係するマスコミの入社試験を受けた。毎日新聞、日本経済新聞、東洋経済新報社の3社を受け、三つとも内定をもらった。

毎日を受けたのは、同社が『エコノミスト』という週刊誌を出しており、毎週それを読んでいたため、入社すれば『エコノミスト』誌に自分の論文を載せてもらえると思ったからだ。マスコミの他社にも行きかけたが、当時、朝日、毎日、読売、NHKの4社は同じ日に入社試験をしていたので、毎日の試験を受ける以上、朝日、読売、NHKは受けられなかった。

大学院での勉強を修士でやめ、毎日に入社後、地方支局勤務を経て、念願の東京本社編集局経済部に配属された。証券市場を見る仕事(兜町記者クラブ)や大蔵省(いまの財務省)、通産省(いまの経済産業省)、農林省(いまの農林水産省)、金融界を見る日銀担当のほか、経団連会館の中にある記者室に席をもらって、繊維、化学、鉄鋼、自動車など、多くの民間業界担当を経験させてもらった。

そのうちもっと勉強したい、とくに海外で勉強したい気持ちが強まり、フルブライトの留学試験を受けたら、合格したので、米国ニュージャージー州にあるプリンストン大学国際金融学科に行った。1976年夏から1977年夏までの約1年である。

その間、勤務先の毎日新聞は在籍のまま休職にしてもらった。プリンストンでは、国際金融や貿易だけに限らず、経済や国際政治についても大いに勉強した。1977年夏に帰国、毎日新聞に復職したが、半年経った1977年末には、毎日新聞を退社した。

それは、それ以前、初めての留学以前である1976年初めに、金融界取材しているうちに、取材先の一つである野村グループの幹部から『キミは我が社で海外の調査部門を指導できる素質のある人間だと思ふ。新聞記者もいいが、それを辞めて我が社に来ないか。』という話があったからだ。どうするべきか、私は迷った。

『考えさせて下さい。しかしこの話し、あなたは本気ですか?』と聞き返した。するとその方は『当たり前だ。人の一生を左右するようなことで、私は冗談は言わない。』といわれた。さらに、『今すぐ返事しなくていい。決断が付いたら連絡してくれ。この話にいつまでという期限はないが、まあ君が若いうちだな。おのずと期限があるというぐらいに思って、じっくり考えて欲しい』と付け加えられた。

プリンストン大学で勉強している間中、このさき我が人生をどう生きようかと、極端に言えば、毎日思い悩んでいた。

プリンストン大学のキャンパスは日本では想像も出来ないくらい巨大である。芝生にはリスやウサギのほかに、カナダから飛んできた野生の雁が動き回っている。林の中から飛び出してくる『鹿に注意』という掲示板まで、出ている。キャンパス内に小型飛行機の発着場からゴルフ場、競艇用の湖まであるので、何時間でも歩き回れる。

その大キャンパスを、まだ小さかった子供たちと歩いているうちに、大伴家持の歌を思い浮かべたのもこの頃である。

『うらうらに照れる春日に雲雀上がり、心かなしも一人し思えば』

ジャーナリストであることにはかなりの執着と多少の誇りを持っていたので、転職するのにこの頃、相当な迷いと悩みがあったのである。でも、プリンストンにいる間に、私は『帰国したら転職しよう』という決断をした。」

これを読むと、福島氏は、1977年当時、転職について逡巡されたようである。いずれにせよ、そういう経緯で福島氏は1978年1月、(株)野村総合研究所に入社され、2004年12月6日、60歳の誕生日に定年退社されるまで、27年間、野村総研に勤務された。一口に27年間といっても、福島氏の場合、ずっと一カ所でコツコツ研究をされた訳ではなかったようだ。78年1月の入社後2年半は東京で勤務された。80年8月、主任研究員となり、米国ワシントンDCにあるブルッキングス研究所(同研究所と野村総研は提携関係にあった)に客員研究員として派遣された。ブルッキングスでの任期1年を終えると、そのまま野村総研のニューヨーク事務所へ転勤された。

ニューヨークではウォール街の調査マンや経営者と会って情報収集するのが主な仕事だったようである。同時に福島氏は、毎月1回、必ずニューヨークからワシントンへ出張していたと聞いている。

ブルッキングス研究所で1年、野村総研ワシントン事務所長として3年、更に後年(1994年から96年まで)ジョンズ・ホプキンス大学教授として2年間、計6年間を福島氏はワシントンD.C.で過ごしている。ワシントンとの関わりについて福島氏は2009年の著書『オバマがつくる福祉資本主義』のあとがきで述べられている。また先に紹介した立教大学大学院生の研究誌でも、ワシントンとヨーロッパでの研究生生活について触れておられる。それらをほぼそのまま

引用しておきたい。

「私はワシントンとの関わりが深い。1970年代から断続的に、計9年をアメリカで暮らした。なかでも首都ワシントン D. C. には6年も住んでいた。永住権（グリーン・カード）を持って暮らしていた時期もある。

ワシントンにいたときも、その後も、アメリカ観察を続け、勉強しながら論評してきた。私がとくに強く惹かれるのは、ワシントンの政治である。あの徹底して開放的で、激しい競争に明け暮れて躍動している政治を見てみると、いまでも楽しくて仕方がない。とくに1980年代、30代後半にワシントンで仕事をしていたときは、充実していた。昼食に二時間もかけているような立場の人たちと世界情勢を話し合い、シンポジウムに出て発言したり、現地の新聞・雑誌に寄稿したりしながら、東京へ頻りにレポートを書いて送っていた。同時にアメリカを知るための古典であるトクヴィルの『アメリカにおける民主主義』や『フェデラリスト・ペーパーズ』を読んだりして、アメリカという国の特異な思想的骨格を知ろうとした。古き良き日々だったと思う。

その頃から海外調査は現場主義に限る、と思うようになった。日本に帰国後、90年代半ば、94年夏から96年夏まで、再度ワシントンに二年ほど住んだ。今回は、勤め先から研究休暇をもらい、ジョンズ・ホプキンス大学の大学院大学である高等国際問題研究院（SAIS）の客員教授となった。日本経済を教えた。

やはりワシントンの政治と経済政策は面白かったので、この頃、ある雑誌にワシントンの話を連載した。

96年夏に帰国、3年ほど野村総研でコンサルティングの仕事をした。政府機関や民間企業、国際協力事業団などいろんな顧客にコンサル案件を売り込み、契約をもらうと、調査し、レポートを書き、顧客に報告した。

コンサルティングの仕事は、ものを調べることが好きな人間には楽しい仕事である。外務省や沖縄県から調査プロジェクトをもらったので、90年代末の在日の3年間で16回も沖縄に出張した。国際協力事業団の委託調査でモンゴルの開発計画を作ることになり、モンゴル共和国にも合計4ヶ月半住み、ホテル暮らしをした。標高800メートルもあるモンゴルの冬は零下30度にもなる。夏の大草原が氷結し大雪原に変わる。4輪駆動車で雪原を踏破するのは、それだけで面白い経験である。

99年春にはヨーロッパに転勤になり、2002年夏まで在欧生活を3年間経験した。勤め先での肩書きはロンドン支店長ではなくヨーロッパ現地法人社長だった。これを奇貨として、3年間の滞欧中、業務の一環としてEU加盟国（候補国を入れて27カ国）の首都をすべて訪問し、政策当局者や経営者と意見交換した。

アポイントを取って会う前に、もちろんEC委員会が出す各種の報告書も読み、勉強会を開

き、政策課題に対するヨーロッパ知識人たちの意見を聞いた。これも得難い経験だった。3年間の欧州駐在を通じて、アメリカがヨーロッパに及ぼしている影響力がいかに強大かを知った。同時にヨーロッパ人たちに共通しているアメリカのある部分には眉を顰めようとする姿勢、健全な対米批判精神には共感することが多かった。

アメリカで計9年暮らしたあとヨーロッパに3年滞在したことで、私のアメリカ理解は深まったように思っている。」

福島氏は、2002年夏欧州から戻って後、東京で、サラリーマン・エコノミストとして仕事をされたようである。チーフ・エコノミストという肩書きで、2年半ほど、日本国内で自由に仕事をしておられたようだ。世界の政治経済について随時レポートを書き、日本国内で講演に行くこと。それに論文を提出して時々海外に出かけ、国際会議で話すのを主な仕事しておられたと伺っている。

国内では九州、山陽、山陰、北陸、東北など、各地に出歩いて講演をされ、その際、観光や名所旧跡も良く見て回られたようである。

2004年12月、野村総研で定年を迎えられ、3ヶ月の休養後、2005年4月から立教大学で教壇に立たれるようになった。担当された科目は「経済政策論」や「経済学入門」だったという。そのほかに福島氏は、毎年ゼミの学生を連れて、ヨーロッパへ調査旅行に行かれた。福島氏も学生たちもそれを楽しみにしていたようで、立教大学教授時代に福島氏が出された著作の多くの部分は、EC委員会などを訪問したインタビュー調査と自分の足を使って現地で集めた資料に依拠しているという。

福島氏はサラリーマン時代から2009年末までに10冊の単行本を出された。賞を三つ受賞されている。時期区分すると、野村総研のサラリーマン時代27年で6冊出し、立教の5年間で4冊である。勤務年数と出版冊数だけを比較すると、立教大学時代の方が、年間著書数で見た書物の生産性は高くなったことになる。これは立教大学の研究環境がよほど良かったからであろうか。

研究業績の中の刊行書籍リストに見られるように、福島氏の研究分野は、アメリカ経済、ヨーロッパ経済、日本経済、そして環境エネルギー問題と、多岐に及んでいる。研究領域が広いのは、福島氏がアメリカに9年（うち首都ワシントンに6年）、ヨーロッパに3年と計12年間を海外で暮らし、米欧の経済政策を現地で観察してこられたからではなかろうか。

地域別および刊行年順に並べると、米国についての本は『暴走する市場原理主義』（2000年、ダイヤモンド社）、『アメリカのグローバル化戦略』（2003年、講談社）、『オバマがつくる福祉資本主義』（2009年、亜紀書房）の3冊がある。ヨーロッパについても福島氏は『ヨーロッパ型資本主義』（2002年、講談社）、『アメリカ型資本主義を嫌悪するヨーロッパ』（2006年、亜紀

書房),『持続可能な発展 ヨーロッパからの発想』(2007年, 税務経理教会)の3冊を上梓している。

それ以外では日本経済について『日本経済の正しい理解と明るい展望』(2004年, 日経BP社)がある。更に別の視覚から国際経済を論じた著作には、『太平洋の時代』(1994年, 東洋経済新報社),『日米欧世界』(1998年, 筑摩書房)を挙げることが出来る。また, 特定国の経済を論じたのではなく, 横断的に世界経済の現状と課題を論じた著作もある。2009年刊行の『環境問題を経済から見る』(亜紀書房)がその代表例であろう。

研究分野が広いので, 福島氏の問題意識には首尾一貫性がなく, まとまりがないように見えるかも知れない。しかし, 福島氏の著作を良く読んでみると, そこには一貫して流れる問題意識を汲み取ることが出来る。福島氏はつねに, 人間の幸福を実現するような市場経済はどうしたら造れるのか, どの国の取り組みが今参考になるのか, ということを考えておられるように思える。

近年福島氏はヨーロッパ研究に注力されているが, それは持続可能性を重視する欧州統合の基本戦略から世界にとって有益な参考情報を見いだそうとしておられるからではないか。そう考えると福島流経済政策研究の原点は, 同氏が2002年に出された『ヨーロッパ型資本主義』になるのかも知れない。

以上, 福島清彦氏の研究業績を概観した。筆者は理論経済学(数理経済学), 国際経済学の純粋理論分野で研究してきた者である。経済学の学術的な国際誌を中心に研究を考えてきた筆者が, 福島氏の研究の概観をしていることを不思議に思われる方もおられるかも知れない。しかし, 経済社会の活きた実態は, 福島氏のように歩いて集める情報なしには理解できない。日本国内のみならず, 国際的な経済の現場から得られた情報に支えられた, 洞察深い福島氏の多くの著書は, 非常に貴重な業績だと高く評価したい。